慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	水俣病事件と『苦海浄土』の世界 : シンボルとしての「石牟礼道子」研究のための覚書
Sub Title	Minamata disease and the cosmology of "Paradise in the sea of sorrow" : a study of symbolizing process of Michiko Ishimure
Author	烏谷, 昌幸(Karasudani, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2021
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research : annals of the Institute for Journalism, Media & Communication Studies). No.71 (2021. 3) ,p.15- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集1 : 現代民主主義におけるマス・コミュニケーション
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20210300-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

水俣病事件と『苦海浄土』の世界

――シンボルとしての「石牟礼道子」研究のための覚書――

烏谷昌幸

▶1　石牟礼文学の浸透力

文学者の田中優子は，2020年に出版された『苦海・浄土・日本　石牟礼道子　もだえ神の精神』の冒頭において，自らの石牟礼文学との邂逅の瞬間を次のように記述している。

> 石牟礼道子とは何度も出会ってきた。もちろん一方的に，である。最初は1970（昭和45）年，大学一年生のとき，法政大学文学部日本文学科の授業においてであった。古代文学者で民俗学者の益田勝実が，その前の年に刊行されたばかりの『苦海浄土―わが水俣病』のくだりを，声に出して読み始めたのである。耳に聞こえてくる言葉を追いながら，「これも文学か。この世にこういう文学があったのか」という驚きが湧き上がっていた。
> ‥‥石牟礼道子の文学は私にとって「異世界」でありつつ「普遍」であり，一地方の言葉の世界でありながら，身体に響く言葉であった。そしてなにより，私の世代に向けられた言葉であった。胎児性水俣病患者の最初の人々は，私と同世代だった。「私は彼らだったかもしれない」という思いを，私はずっと持ち続けている。

近世文学を専門とする研究者が，50年を経て思い詰めたように石牟礼道子について語り始めること自体が既に興味深いが，石牟礼のことを「道子」と表記しながら語っていく田中の文章は，まるで心の中に大切にしまっていた宝物をおそるおそる取り出すような手つきを思わせる。それだけ田中にとって石牟礼道子が大切な存在であるということであろう。

おそらくこれは特殊な例ではないであろう。田中のように一冊の著書としてその思いを完成させる人が多いとは思わないが，おそらく，『苦海浄土』や石牟礼道子との出会いを特別な感情とともに大切に記憶している人は数多くいるはずだ。中にはその後の職業生活や人生そのものを大きく左右された人もいるであろう。

朝日新聞の夕刊紙面でかつて掲載されていた企画連載シリーズ「ニッポン人脈記」は，著名人たちの意外な人脈を掘り起こしていく秀逸な企画であったが，ある時，福岡県で小さな出版社を営む人物が取り上げられたことがある。水俣病事件で患者支援運動に参加して逮捕された経歴を持つ福元満治だ。

記事の冒頭において，福元が出版の仕事をするかたわら，アフガニスタンにおける医療活動の支援運動に「深入り」している人物であることが描かれている。その上で，福元を出版の道に進ませたのが，実は石牟礼道子と渡辺京二の二人であったことが紹介される。

渡辺は今日では『逝きし世の面影』などの著作で知られる著名な文芸批評家であり，石牟礼文学の最大の理解者，批評者として知られる人物だ。記事の中では，渡辺が石牟礼の『苦海浄土』の最初の連載を掲載した雑誌の発行人であったこと，また，患者支援運動の先頭に立ち，1970年の厚生省抗議においては福元ら若い支援者たちを鼓舞しながら，共に逮捕された経歴を持つ人物でもあったことが紹介されている。その上で，記事は，福元の今日の活動に水俣の経験が大きな影響を及ぼしていることを次のように描いていくのである。

> 「石牟礼さんたちがいなかったら，水俣病は単なる損害賠償請求にすぎなかっただろう。」と福元。人々の痛苦をわがものとする魂の表現者がいたからこそ，水俣病は戦後日本の暗部をえぐる事件になったのだ。
>
> 「そして，石牟礼さんは水俣で，ある種の幻を見せてくれた。それなしには生きていけないような幻を」。福元にとって出版は，その「幻」を追い求めることなのかもしれない。
>
> （朝日新聞2008年1月25日「わが町で本を出す①　福岡はアフガンへの窓」）

福元の「それなしには生きていけないような『幻』」という表現は，石牟礼文学の「浸透力」を雄弁に物語る大変興味深い言葉である。石牟礼の創出した世界観，またそれを表現した彼女独特のシンボリズムが，読む人間の心の中にいかに深く入り込んで根を張る力を持っていたかがここから伺えるのである。

本研究の問題意識は，まさに，ここでいう「幻」がもつ力をいかにして研究することができるかという点にある。つまり，石牟礼道子の『苦海浄土』の世界観が持った影響力の大きさについて考えることが，本研究の課題である。なかでも，石牟礼文学のジャンルを超えた「浸透力」について考えるために，シンボリズムやシンボルの取り入れというシンボル論の概念を用いることの有効性を確認することができればと考えている。

以下においては，この課題に取り組むための準備作業を行う。まず『苦海浄土』が登場してきた社会的背景を把握しておくため，1950年代の日本社会における水俣病事件の扱いがどのようなものであったのかを，事件初期報道の検討を通じて確認する。その上で，石牟礼道子の最大の理解者である渡辺京二による石牟礼論の要点について確認する。特に彼が石牟礼の「方法的秘密」と呼んだものの内容について取り上げておきたい。

渡辺の議論を起点としつつ，本研究の狙いは，石牟礼文学についての研究とメディア社会学的な水俣研究を架橋する理論的枠組みを構築することにある。ここでいうメディア社会学的な水俣研究として想定しているのは，次のようなものである。ひとつには，ジャンルを横断して新聞，雑誌記事，テレビ・ドキュメンタリー[1]など，「苦海浄土」の世界観がメディア表象の中に広く浸透していったプロセスを辿る研究である。いまひとつには，これらメディア表象への浸透とリンクする形で，水俣という場所が，環境問題を学ぶための「聖地」のようなイメージを獲得していき，多くの人々をさながら「巡礼者」のように引きつけていくプロセスの研究である。

いずれにおいても，石牟礼の創出したシンボリズムが，「水俣」を想起する人々の想像力の中に深く浸透していく力を持っていたことが研究の焦点となってくる。したがって，シンボリズムの持つ社会的浸透力をどのように説明することができるかが大きな課題となってくる。この課題のためには，石牟礼道子の世界についての文学的研究と，人々を魅了し，人々の中に取り込まれていった「石牟礼道子」像の二つを明らかにしていく必要がある。本稿はこれらの課題についての現状報告である。

なお，本特集における共通テーマの民主主義論との関連でいえば，シンボリズムの社会的な「浸透力」を説明するための理論的枠組みを構築することは，「民主化」を促す中長期的なメディア言説の変動や集合行動のあり方を理解する上でも極めて有益であると思われる。

▶ 2　水俣病事件初期報道

水俣病事件の初期報道がいかなるものであったかについては，いち早く宇井純が『公害の政治学』において詳細な検討を加えている。また近年においては，初期報道を題材としながら，それを水俣の言説と表象の研究としてまとめた小林直毅編の『水俣の言説と表象』がある。

本稿は，この『水俣の言説と表象』を出版した水俣病事件報道研究会の共同研究をもとにしている。報道の分析については，既にこれらの文献において詳細が述べられているので，ここでは省略し，要点のみ確認していきたい。

まず第一に，初期報道に関してまず最初に確認しておくべきことは，その基本的な報道姿勢である。一般に1950年代当時は環境問題への意識が現在ほど強くなかったので，被害者への同情があまり集まらなかったのではないかと思われるかもしれないが，初期報道全体をみる限り，被害者への同情は非常に大きかったことが分かる。確かに，1950年代中央紙は水俣病問題についてほとんど関心を払っていない。しかし地方紙，ブロック紙および全国紙の地方版で大量の記事が書かれた[2]。そして報道の基本姿勢は，被害漁民への強い同情によって特徴付けられるといっても過言ではなかった。

そのため，いち早く社会問題としての水俣病事件に注目して，その全体像を捉えようとした宇井純の『公害の政治学』は，地方紙の果たした役割を高く評価している[3]。

> 水俣病の進展に新聞が果たした役割は大きい。ある時は正確な情勢判断が，ある時は何の気なしの誤報が，被害者たちの運動を力づける結果を生んだ。今になって，当時の記事を読み返してみても，そこにいくつかの生きた記者たちの正義感の息吹きを読み取ることができる。
>
> （宇井 1968: 26）

だが注意深くみると分かるように，新聞記事はいつも漁民たちに同情しているが，企業の側を強く批判するということがなかなかできなかった。コラムの中で小さく囁くように指摘する以外，原因究明のための一切の情報提供を拒み続ける企業の姿勢を強く批判することができなかった。「水俣病の原因は科学的にまだ分かっていない」という工場側の言い分を報道するものの，原因究明のために工場側が積極的に協力しない事実を批判することがなかった。

第二に，この水俣病の原因究明問題は，初期報道を考える上で非常に重要である。ここで熊大学医学部とチッソの側の論争について改めて振り返ってみよう。端的にいってこの当時の報道は，一般的なセオリーどおりの客観報道を実践したに過ぎないが，この客観報道が結果的に事態の真相を曖昧にしてしまった。

1959年の７月に熊本大学が「有機水銀説」を発表し，水俣病の原因解明に大きく近づいた辺りからチッソの側では危機感を強めるようになり，熊大医学部への猛烈な巻き返しが始まった。その際「原因究明の必要性」，「原因物質の特定」という論理が徹底的に強調されたのである。

ただしこれは「海の異変」理論とでも呼ぶべき理屈とセットで把握しないと，少々意図が分かりにくい。チッソはこの時期，全国に類似の工場があるなかで「なぜ水俣でだけ」問題が起きるのか，またチッソが長い操業の歴史を持ちながら，「なぜ今」になって患者が続発するのか説明がつかない，結局問題は工場排水ではなく，海そのものに何か正体不明の異変が生じたと考える方が正しいのではないかという説を公然と主張した[4]。

水俣でチッソ吉岡社長を「国会に証人喚問する」と威勢よく吼えた国会調査団も，帰京

後の報告においては熊大医学部の有機水銀説とこの「海の異変」理論を両論併記的に紹介せざるを得なかった[5]。またこの時期にチッソが持ち出した「爆薬説」，東京工業大学清浦教授が唱えた「アミン説」は，この「海の異変」理論を具体化しようとするものであった。医師の原田正純は，これらが専門家の眼からみると，学説といえるような代物ではなかったと指摘しているが，新聞はこれらの説を大きく取り上げ，熊大医学部の有機水銀説が，数ある学説の中の一つでしかないような印象をつくり出すことになってしまったのである（原田 1972）。

この点は中央紙の反応をみると露骨に判明する。表１は，水俣病事件初期段階における朝日新聞東京本社の関連記事を整理したものである（キーワードは「水俣病」）。中央紙が当初，水俣病事件にいかに関心が薄かったかがよく分かる。水俣病事件報道研究会で全国紙の分析を行った山口仁は，全国紙が水俣病問題を盛んに報道するようになるのは1960年代中盤，新潟水俣病問題が発覚したあたりからであり，それ以前に水俣病問題は，「加害者」と「被害者」が存在する「社会問題」としては意味づけられていなかったと指摘している（山口 2007）。山口は1959年から1960年にかけてわずかに行われた報道が，単なる「科学報道」の次元にとどまっていたと指摘している。つまり加害者である企業の責任問題には一切言及しないで，原因物質の特定に関する学説にのみ特化して水俣病が語られていたというのである。

山口の指摘は，表１が示す20本程度の記事の中で，東京工業大学清浦教授の存在感が異常に大きいことで裏付けることができる。記事の内容は必ずしも清浦説を鵜呑みにしているわけではないが，明らかに彼が水俣病事件に関わる重要人物であるかのような印象，少なくとも，公的な言論の場において，水俣病の原因に関しては「学説まちまち」（朝日1960年４月27日）という状況がつくり出され，その学説論争の範囲に問題が制限されていることが分かる。

朝日新聞で科学部長を務めた経験もある柴田鉄治は，この水俣病事件報道を，対立する見解があればそれらを公正に取り上げるべきであるという客観報道の原則がもたらした弊害であったと指摘している（柴田 1994）。メディア社会学者のトッド・ギトリンの表現を借りていえば，客観報道の手続きに従ったメディア・フレームの中で，挑戦者の政治的主

表１　水俣病事件報道（朝日新聞1957年４月～1960年４月）

1957年４月１日	奇病治っても“廃人”熊本県に厚生省で調査
８月13日	水俣湾（熊本）の漁獲禁止奇病魚に含む金属の中毒
1959年11月３日	水俣病で漁民騒ぐ
11月３日	水俣の騒ぎ静まる
11月６日	水俣病対策委
11月12日	水俣病・清浦教授の報告
11月13日	原因は「水銀の有機物」水俣病
11月13日	水俣病に見ごたえ
11月14日	知事があっせん水俣病問題
12月８日	水俣病恐れて工場設置反対千葉の漁協組
12月18日	補償金三千五百万円水俣病紛争かたづく
1960年４月９日	すわり込みすでに十九日水俣病補償金問題
４月９日	病源究明へ水産庁が指示
４月12日	魚貝肉の毒が原因水俣病の水銀説否定清浦教授
４月13日	水俣病の原因清浦教授、質問攻め総合研究協議会
４月13日	結論はまだ早い協議会
４月13日	症状は全く違う九大勝木教授清浦説に反論
４月13日	慢性的な症状でも似ている清浦教授の話
４月15日	清浦教授を詰問水俣病で漁民の代表
４月22日	「水俣病」患者を訪ねて生ける人形少女
４月27日	（上）学説まちまち
４月28日	（下）さらに総合的研究

張の現実性（リアリティ）が既存の権威と妥協させられ，中和され，弱体化されていったのだといえる。

メディア社会学の知見としていうならば，報道が「何を無視できないのか」が明らかにされた事例であったともいえる。企業や東京の有名大学の教授が主張する学説が，熊本大学の学説と対立して登場した場合，専門的見識をもたない新聞記者は，どうしてもそれら主張を併記しないわけにはいかなかった。特に現地取材に時間を費やしている記者と異なり，現場から遠く離れた東京の編集現場で事件を想像している人間にとって，大企業や有名大学の主張を無視することは難しかったのである。この結果，熊大医学部の側の有機水銀説の説得力は弱められることになってしまった。フレーム分析の批判的パラダイムが議論してきたように，被害者側の原因究明の行為が，加害者側の意図的で悪質な「煙幕」と両論併記されることで「中和」されてしまったのである[6]。

他方で，この時期，「工場排水か，それとも海の異変か」という問題をもっとも分かりやすく検証する方法に気が付いていた人々もいた。その方法とは，工場排水を用いた動物実験である。この時期チッソ付属病院の細川一医師は，猫を用いた実験を秘密裡に行っていた。有名な猫400号の実験である。これは，工場排水を混ぜた餌を同年７月から投与されていた猫400号が，10月６日になって水俣病の症状を発症した実験である。言うまでもなく，これによってチッソが主張する「海の異変」ではなく，工場排水こそが水俣病の原因であることが証明されたはずであった。

だが，この実験結果が判明した時期，熊大医学部への反論書を作成していたチッソ水俣工場の技術部次長・市川正は，この実験結果を反論書に掲載することを避けた。市川は，実験例が１件だけであるから，もう少し実験を続けて，「再現性」が確認された後に公表するという条件を持ち出して，細川を説得したのである。こうしてチッソ内部では水俣病の核心に迫る実験が行われながら，その情報が隠ぺいされ，対外的には「海の異変」理論が声高に主張されたのである。

内部で進んでいた原因究明の実験成果を隠蔽し，熊本大学医学部の執念の研究成果に対して，時間稼ぎとも思えるような学説を煙幕のように繰り出したこのプロセスは，少なくとも事件初期段階において，企業の社会的責任を曖昧にすることに大きく作用したと結論付けることができる。

いずれにせよ，原因究明にあまりに時間がかかっていることは，既に1959年の段階で誰の目にも明らかにであった。熊大医学部の有機水銀説が決定的なものではなく，工場側の反論によって「中和」され，「学説まちまち」の状況がつくられた段階で，なぜそれぞれの言い分に決着をつけるためには，工場がもっと積極的に内部の情報を提供し，原因究明に協力的になるべきであるということを強く批判できなかったのか。この点については大きな悔いが残ることだけは確かである。

第三に，当事の新聞記者の漁民や漁村への取材が，極めて表面的なものにとどまっていたことを指摘する意見は少なくない[7]。石牟礼道子の『苦海浄土』にも新聞記者を描いたシーンが登場する。石牟礼は，新聞記者の親切な忠告がありがたい面もあったが，その取材の仕方は総じて無遠慮で乱暴で表面的なものであったことを次のような描写によって風刺している。

> 新聞記者や雑誌の記者たちがやってくる。彼らはじつにさまざまのことを質問する。彼らは紙切れとペンをまずとりいだす。
>
> ―えーと，お宅の生活程度は。
>
> ―はい？
>
> ―つまりですね，畑はいくらで，舟は何トンですか。
>
> このような無神経な質問にでもひとびとはつい持ちまえの微笑を浮かべて答える。外来者用のこ

とばを。心の中では憮然としながら。
　―食べものは，主食は何を食べていられますか，米半分，麦半分，甘藷，甘藷が主食ですね。ほう，おじいさんはご飯はあまり食べない？魚をねえ，魚を食べるとご飯いらないですか。いったいどのくらい食べるのです！おさしみを丼いっぱい！へえ，それじゃ栄養は？
　記者たちや自称社会学の教授たちはビックリする。“なんとここは後進的な漁村集落であるか”そして記事の中に“貧困のドん底で主食がわりに毒魚をむさぼり食う漁民たち”などという表現があらわれたりする。

（石牟礼 1972: 209–10）

しかし漁民の生活の本当の豊かさであるとか，患者の世界の美しさは石牟礼道子その人がはじめて描き出した世界であり，新聞記者はおろか当事の日本社会でそうした世界観でもって水俣病患者の世界を描くことのできる人は皆無であった事実を忘れてはいけない。

▶ 3　文学としての『苦海浄土』

石牟礼道子の『苦海浄土』は，事件初期段階の幕引きをどのように捉えたのであろうか。新聞報道が「円満解決」と評した1959年の水俣病事件の区切りは，この作品の中では次のように描写されている。

大人のいのち十万円
子どものいのち三万円
死者のいのちは三十万円
と，わたくはそれから念仏にかえてとなえつづける。

（石牟礼 1972: 117–8）

石牟礼がここで取り上げているのは，チッソ水俣工場が患者家庭互助会との間に結んだ，いわゆる「見舞金契約」の内容である。正確には死者への弔慰金が32万円，成人患者への年金10万円，未成人患者の年金３万円（成人に達した後は５万円）という金額が，「見舞金」として支払われた。またこの契約には，「将来水俣病が工場排水に起因することが決定した場合においても新たな補償金の要求は一切行わないものとする」という項目が盛り込まれた。

初期報道において水俣病問題は，「産業間紛争」として語られる側面が強かった。日本経済を牽引する立場の強い二次産業が，立場の弱い衰退産業である漁業関係者の漁場を荒らして，迷惑料をいやいや支払ったという筋書きで描く言葉しか存在しなかった。それ以外の言葉を持たなかったからである。そこには水俣病騒動によって哀れにも生活の糧を失って食い詰めた漁民がいただけで，先に山口仁の分析において指摘されていたように「公害事件」の「被害者」は存在しなかった。そして現在言われるような意味での「患者」もまた存在しなかったのである。

水俣病事件に限らず，およそ社会問題の被害者に対する政治的救済とは，このような機械的な補償金での処理という形を取らざるをえない。しかし石牟礼は，『苦海浄土』において，これをやむを得ない現実として受け入れることを拒絶し，補償金の値札をつけられた患者たちひとりひとりの生がいかに美しいものであったかを描き出そうと努め，そのことによって，その美しい生を破壊し，蹂躙しながら何の責任もとろうとしない企業の暴力性を浮かび上がらせようとしたのであった[8]。

私小説としての『苦海浄土』

さて，このように，当時の事件幕引きの「円満解決」報道との対比の上で石牟礼道子の

『苦海浄土』の意義を強調しようとすると，この作品の告発型ルポルタージュとしての側面が際立ってくる。現に1969年に『苦海浄土』が講談社から出版された当時，石牟礼が水俣病患者の支援運動の先頭に立っていたこともあいまって，多くの人がそのような受け取り方をした。水俣病を含む公害問題全体に対して，その後大きな関心が集まるようになっていった世情の雰囲気も大きく関係しているといってよい。

だが，そうした世の風潮に釘を刺し，一個の優れた文学作品として『苦海浄土』を読むことを提唱したのが，彼女の最大の理解者である渡辺京二であった。渡辺の「石牟礼道子の世界」が早くも1972年に書かれていたことは，今日からみて大きな驚きである。この文章はいま読んでも新鮮であり，古さを全く感じさせない。

渡辺がこの中で指摘しているもっとも重要な点は，『苦海浄土』が書かれた「方法」である。『苦海浄土』はいわゆる「聞き書き」の方法で書かれたものではない。多くの人はそう信じていたし，だからこそ，第一回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞することにもなった（本人が辞退したため正式に受賞はしていない）。しかし，この作品で登場人物たちが饒舌に語る場面のほとんどは，実際の発言や出来事に石牟礼が脚色を加えて仕上げたという性質のものではない。完全に彼女の想像によって書かれているのである。渡辺は，『苦海浄土』の「方法的秘密」に気がついた瞬間のことを次のように描写している。

> ‥‥あることから私はおそるべき事実に気づいた。仮にE家としておくが，その家のことを書いた彼女の短文について私はいくつか質問をした。事実を知りたかったからであるが，例によってあいまいきわまる彼女の答えをつきつめて行くと，そのE家の老婆は彼女が書いているような言葉を語ってはいないということが明らかになった。瞬間的にひらめいた疑惑は私をほとんど驚愕させた。「じゃあ，あなたは『苦海浄土』でも…」。すると彼女はいたずらを見つけられた女の子みたいな顔になった。しかし，すぐこう言った。〈だって，あの人が心の中で言っていることを文字にすると，ああなるんだもの〉。この言葉に『苦海浄土』の方法的秘密のすべてが語られている。それにしても何という強烈な自信であろう。
>
> （渡辺 1972: 311）

石牟礼が想像で書いていたという事実は，あくまでも問題の入口に過ぎない。おそらく渡辺以外の人間がこの事実を知ったとしても，ただの創作秘話にしかならなかったであろう。しかし，渡辺は，「あの人が心の中で言っていることを文字にすると，ああなる」という石牟礼の苦し紛れの発言ともとれる言葉の中に，彼女の「方法的秘密」を見てとった。ここから展開していく渡辺の石牟礼論は他の追随を許さないものがある。

渡辺は，石牟礼の方法が，「乗り移り」にあると考えた。彼はまず『苦海浄土』から，次のような一節を取り出してみせる。石牟礼が，水俣市立病院で重度の水俣病患者・釜鶴松の姿を覗きみた時の心情が綴られた箇所である。

> この日はことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に，耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような，魚のような瞳と流木じみた姿態と，決して往生できない魂魄は，この日から全部わたくしの中に移り住んだ[9]。

渡辺はいう。通常，批評家の誰もがこの一文を，一種のヒューマニズムの表明と読むのではないかと。ヒューマニズムという表現にこだわらなくとも，普通この箇所は，重度の水俣病患者を目の当たりにして，その姿にショックを受け，改めて水俣病事件の不条理に怒り，悲しみ，被害者の代弁者となることを著者が決意していった場面として読めるであろう。おそらく通常それ以外の読解はあり得ないはずだ。

だが，『苦海浄土』の不思議な世界を読み解こうとするならば，この箇所をそう読んでは

いけないと渡辺はいう。彼はここに，石牟礼道子の本当の「方法的秘密」が隠されていることを解き明かしていくのである。

> この文をそういうふうに読むかぎり，つまり悲惨な患者の絶望を忘れ去ることはできないという良心の発動と読むかぎり，『苦海浄土』の世界を理解する途はひらけない。そうではなくて，彼女はこの時釜鶴松に文字どおり乗り移られたのである。彼女は釜鶴松になったのである。なぜそういうことが起こりうるのか。そこに彼女の属している世界と彼女自身の資質がある。
>
> （渡辺 1972: 312）

石牟礼が，文字どおり，釜鶴松によって乗り移られたのだと渡辺はいう。それは一体どういう意味であろうか。渡辺は，石牟礼が釜鶴松と同じ世界の住人，近代人がすっかり忘れてしまった感覚を共有する人々であるという。彼らは，近代以前の，「自然と意識が統一された世界」の中で人々が持っていた感覚を共有しているというのだ。渡辺は石牟礼によるいくつかの自然描写を取り出してきて，そこに近代人が忘れ去った自然に対する独特の感覚が潜んでいることを読み解いていく。

それは例えば，水俣の漁師たちが，海の中の風景を花にたとえながら饒舌に語る場面であったり，舟の上でタコ壺の中からなかなか出てこないタコに向かって説教をする場面であったりする。つまり，「生きとし生けるものたちが照応し，交感していた世界」（同314）であり，海とともに生きる漁師たちの豊饒で濃密な世界の描写である。こうした自然と未分化な人間の感覚は，神話や迷信を生み出す前近代的な意識を支えるものであり，近代の知識人にとっては克服されるべき，忌むべきものであった。しかし，石牟礼は，その感覚世界に初めて文学的表現を与えたのである。

石牟礼の文学を，内外の文学史の中にどのように位置付けることができるかという問題は，本研究の範囲を大きく超えるものであり，この点についての渡辺の論理を追うことは控えたいが，ここで彼が言おうとしている次の点は見落としてはならない。それは，水俣病患者たちの世界が石牟礼によって外側から観察され，描写されたものではないということだ。じっくりと慎重な観察を外側から重ねたことで，よく描けているという世界なのではない。水俣病患者の世界は，同時に彼女自身が属する世界でもあるがゆえに，彼女は内側からその世界を克明に描き出すことができたことを渡辺は強調した。工場排水によって破壊され，崩壊していく世界の美しさを，「自己表現」としてうたいあげたのが，『苦海浄土』であり，石牟礼にとっての「わが水俣病」であったのだと。

シンボルとしての「石牟礼道子」

渡辺の石牟礼文学論は，大きな説得力を持つものであるが，ひとつの当惑を覚えることも事実である。彼は石牟礼が水俣病患者に「乗り移る」ことの必然を語ったが，もしそうであるならば，なぜ『苦海浄土』の世界は，前近代的な共同体から完全に切り離されているはずの現代人にとって，これほどまでに訴求力を持ち続けてきたのであろうか。共同体とは，本来排他的なものであり，その内側に属するものと外側に属するものとの間に「共感」が生じにくい性質を持つのではないか。なぜ石牟礼のシンボリズムは，「水俣」や「不知火」というひとつのローカルな文脈を超えて，現代人の中に普遍的な影響を持ち続けてきたのであろうか。

石牟礼道子のシンボリズムが持つ力について考察していく上で，文学的観点ではなく，社会学的な観点からみてもっとも重要なことは，「石牟礼道子」という名前そのものが，強い意味を帯びたシンボルであることに焦点を当てていくことであろう。

戦後の日本社会は，急激な高度経済成長を実現しながらも，その陰で，深刻な公害問題を数多く発生させていった。「水俣病は，業病である」としばしばいわれた。つまりこの問

題には，豊かさを追い求める人間の業の深さが招いた必然的側面があるということだ。

自分たちの享受する豊かさが，少数の犠牲の上に成り立っているということを思い知らされた人間は，多少なり罪の意識を覚えていった。もちろん，何の罪悪感も抱かなかった人間もいるであろう。そのような人々にとって，石牟礼道子という名前には何の意味もない。

しかし，罪の意識を覚えた人間にとって，やはり，「石牟礼道子」という名前は，特別な響きを持ったであろう。「石牟礼道子」は，日本社会における罪の意識を表象する際に想起される有力なシンボルとして機能してきたのではないか。そのシンボル化の背景には，自らの罪を悔い改めるために，「石牟礼道子」という聖なる存在によって，自らの罪を浄化することができると感じた人々が少なからずいたからではないだろうか。

メディア社会学において，構築主義的な考え方が受容されるようになってから久しい。しかし，メディア表象のイデオロギー的前提を暴露する方法はよく知られていても，あるメディア表象が人々の想像力の中に組み込まれていくプロセスを丁寧に検証していくタイプの研究はあまりみられない。ジョージ・ハーバート・ミードの言い回しを借りていえば，人がどのようにしてシンボルを取り入れるのかという点に注目していく必要がある。シンボリズムについて語ることは，単に表現のヴァリエーションを検討するという含意をはるかに超えて，人々が何をどのようにして内面に取り込んでいくのかを分析するために必要な作業である。

石牟礼道子のシンボリズムが，なぜ人々の想像力の中に深く浸透してきたのか。その背景を探っていくにあたって，人々の罪の意識について考えてみることが必要である。罪の意識こそが，石牟礼のシンボリズムを人々に取り入れさせようとする大きな原動力であったのではないだろうか。

▶ 4　バイブルとしての『苦海浄土』

これまで，水俣病事件初期報道の検討，また渡辺京二の石牟礼論の要点の確認を行ってきた。また，手短ではあるが，石牟礼道子のシンボリズムが持つ力について考えるためのひとつの視点についても言及した。ここでは最後に，以上の点を踏まえて，今後の研究課題について触れておきたい。

「石牟礼道子」が，人々の罪悪感を表象するための有力なシンボルとして構築されていったプロセスを検討していくことが，今後の喫緊の研究課題である。この点は，主要紙の分析を通して時系列的に分析を進めていくことができると思われる。おそらく，どこかの時点で「石牟礼道子」は，水俣という特定の文脈を超えて，日本社会の罪の意識の高まりに応じて召喚されるシンボルとなっていった。ミード流にいえば，シンボルとしてより「一般化された意味」が獲得されていったのである。2011年の福島原発事故以後，主要紙がしばしば石牟礼道子を取り上げてきたのは，こうした事情をよく物語っている。

また，この石牟礼のメディア表象の分析と連動させる形で，石牟礼の世界に強く惹かれて，水俣病事件に深く関わった人々の証言を拾い集めていくことも必要である。例えば，写真家の塩田武史は，『苦海浄土』が患者支援運動に関わった人たちの「バイブル」であったことを次のように語っている。

> 『苦海浄土』はその後，私だけではなく，運動にかかわった人びとのバイブル的な存在になってゆく。‥‥石牟礼さんが描いた世界に誰もが操られるように動いていた。患者たちのもつ精神や叡智を学びとって，“魂の絆”をどう取り戻せるかということしかないという。石牟礼文学がその後の表現者に与えた影響の大きさははかりしれない。（塩田 2013: 8）

「バイブル」という塩田の表現は，非常に興味深い。これはありがちな比喩を超えて，『苦海浄土』の社会学的な意味を理解するための重要なヒントのようにも思える。石牟礼道子のシンボリズムの「浸透力」を問うことは，石牟礼文学の真価を正しく理解することと，必ずしも同じではない。高度成長期以後，日本社会の矛盾を目の当たりにして，罪の意識を覚えた人間が『苦海浄土』に出会い，そこに何がしかの救いや自らの生きる指針を見出していったことが想像される。その読解のあり方には，文学論としてみると多くの誤読があったかもしれないが，人々を強く惹きつける力がこの作品にあったことだけは紛れもない事実である。これらひとつひとつの証言を拾い集めながら，石牟礼文学の「浸透力」についての考察を深めていく必要がある。

『苦海浄土』を「バイブル」として位置付ける考え方は，環境問題の「聖地」であるかのようなイメージを獲得した今日の水俣に多くの人が訪れる現象を，一種の「聖地」への巡礼としてみることも可能にしてくれるであろう。修学旅行生たちが尋ねる水俣病資料館の展示は，石牟礼道子の世界観が色濃く反映されており，「聖地巡礼」の重要な観光スポットとなっている。社会学的観点から，こうした「聖地巡礼」が生まれ，維持されている力学について考察を加えていくことも今後の重要な課題である。

以上のような一連の課題を，石牟礼道子が「シンボル化」されていくプロセスの研究として遂行していくこと，そのことによって「シンボルの政治学」における構築主義的展開を充実させていくことが，本研究の目指すところである。

● 注

1. テレビ・ドキュメンタリーとしては，例えばRKB『ドキュメンタリー　苦海浄土』（1970年12月25日）のような作品がある。また小林直毅（2012）によると，『苦海浄土』に「ゆき女」として登場する人物のモデルとなったのが，村野タマノであり，この村野を主人公として取り上げたドキュメンタリーが存在する。NHK『特別番組　村野タマノの証言～水俣の17年』（1972年10月21日）である。筆者の個人的な経験談としていえば，村野の映像を視聴することは，石牟礼作品の幻想性を理解する上で重要な経験であった。映像の中の村野は，一切の解説や脚注を知らずに見れば，どこにでもいる普通の女性である。石牟礼の抽象化，幻想化の力がいかに凄いものであるかを実感することができた経験であった。もちろん，これらの番組において，石牟礼文学のシンボリズムがどのような形で映像化されているのかを丹念に検証することは今後の重要な研究課題である。なお，水俣病事件関連の一連のドキュメンタリー作品に頻繁に登場する「怨」の字の黒旗も，石牟礼の発案によるものであるといわれている。こうしたものもまた，石牟礼の「作品」であり，彼女のシンボリズムの研究の対象に含めていく必要がある。
2. 水俣病事件関連資料を収集，保存している一般財団法人水俣病センター相思社には，これら地方紙をはじめとする事件関連の新聞記事が大量に保存されており，本章ではこれを資料として利用した。ただしデータベースなどで系統的に収集された資料ではないので，厳密な量的分析を行うことはできなかった。
3. 当事熊本県の新聞購読状況は，トップを走る地元紙『熊本日日新聞』，次いで福岡に本社があり九州一円で広く読まれている『西日本新聞』，これらをおって中央紙の『朝日新聞』『毎日新聞』が続くという状況で，これを四大紙と呼んでいたという。宇井はこれら四大紙に加えて『水俣タイムス』のような豆新聞と呼ばれる定期，不定期の小さな新聞の果した役割も高く評価している。
4. 実はこのチッソの「なぜ今」「なぜ水俣だけ」という主張はその政治的意図を別にして，学問的には正当な問いであり，その問いの完全究明は岡本達明と西村肇が2001年に発表した『水俣病の科学』（日本評論社）まで待たなければならなかったという驚きの事実をここで指摘しておかなければならない。
5. 衆議院の社会労働委員会，農林水産委員会の双方で1959年11月12日に報告が行われている。報告の結論部分における政策的対応については内容が異なるが，状況説明に関してはほぼ同じ文章が用いられている。その中でチッソ側の言い分は次のように紹介されていた。
「新日本窒素肥料株式会社においては，水銀については研究に着手したばかりで，実験に基づくデータは発表の段階に至らないが，…次の通りの見解を発表し，有機水銀説は納得できないとしているのであります。すなわち，水俣工場は，昭和７年以来今日まで27年間酢酸の製造に水銀を使い，また，昭和16年以降においては塩化ビニールの製造にも水銀を使っており，これら水銀の損失の一部として工場排水とともに水俣湾内に流入しているのは事実である，しかも，その量は，過去における酢酸生産量19万トン，塩化ビニール３万トン程度であるところから，60トン，最高120トンということであります。しかるに，昭和29年になって突然水俣病が発生した事実は無視できない，また，水俣病は昭和28年以前には全くなく，29年から突発したことは，昭和28年，同29年を境として水俣湾に異変が起こったと考えるのが常識的と思われると言うのであります。」（農林水産委員会議録第４号，昭和34年11月12日，２頁）。
6. 宇井純はいち早く『公害の政治学』のなかで公害問題の「起承転結」と称して，公害問題が被害の発生（第一

段階），原因究明（第二段階）に続いて反論が出され（第三段階），どれが正しいのかさっぱりわからない中和の段階（第四段階）を経る法則性を持つと論じた。この水俣の1959年の局面はまさに宇井のいう中和の段階に該当していたわけだ。そしてこの事例に関していえるのは，企業の側が恐ろしく明確な意図をもって真相の隠蔽をはかったということであり，報道の側はその真相を知らされることなく「円満解決」を祝福する役割を果たしたということだ。

7. 小林義寛は，1954年と1955年の新聞記事を検証した上で，当時の水俣の漁民が「忘れられた存在」であって，水俣市民からは「みえない存在」であったと指摘している（小林 2006: 168–70）。この結果，水俣の海はチッソの工場と漁民が共存する空間ではなく，もっぱら〈チッソの海〉として当時の人々には意識されていたのだといえる。小林直毅はこの点について次のように語っている。
‥‥1950年代半ばの水俣をめぐる言説は，自らが語る対象である「水俣」を，貿易開港を果たし，今後もチッソとともに地域経済を発展させ，日本の経済成長の一翼を担う地域として構築していたのである。‥‥この言説では，水俣の海が，チッソのための天然の良港として語られている。貿易開港を歓迎し，経済発展を志向する言説が，水俣の海を，チッソのための貿易港へと変態させるとき，水俣の海は，そこに暮らす人びとの生活の場として語られることはなくなる。いうまでもなく，海を生活の場とする人びとの暮らす空間が漁村であり，そうした人びとの生業が漁業であり，海を生活の場とする人びとが漁民とよばれる（小林 2006: 27）。
8. 関礼子は『新潟水俣病をめぐる制度・表象・地域』（東信堂，2003年）において，報道などを通じて水俣の悲劇性が強調され続けたあまり，典型的な急性劇症型の患者以外は水俣病患者にあらずという社会「常識」が生まれてしまい，典型症状から外れた患者たちが患者として扱われにくくなってしまう状況が生まれたことを指摘している。これは非常に重要な論点である。しかしここで指摘したかったのは，それではなぜ水俣の悲劇性が殊更に強調されなければならなかったのかということである。水俣病事件にはこうした「意図せざる結果の連鎖」がみられるが，そうした連鎖が生まれてしまうそもそもの理由について考える場合，被害者の運動が乏しい資源でもって世論に訴えていかざるを得ない苦しい状況におかれていたことが理解されなければならない。
9. 石牟礼（1972）126頁参照のこと。

●参考文献

Langer, S.K.（1957）. *Philosophy in a New Key : A Study in the Symbolism of Reason, Rite, and Art*. Harvard University Press.『シンボルの哲学』矢野萬里，池上保太，貴志謙二，近藤洋逸訳，岩波書店，1960年。
Mead, G.H.（1934）. *Mind, Self, and Society ; from the Standpoint of a Social Behaviorist*. Edited and with an Introduction by Charles Morris, The University of Chicago Press. 稲葉三千男，滝沢正樹，中野収訳『現代社会学体系　第10巻　精神・自我・社会』青木書店，1973年。
石牟礼道子（1972）『苦海浄土　わが水俣病』講談社文庫。
宇井　純（1968）『公害の政治学』三省堂。
――――（1988）『公害言論　合本』亜紀書房。
小林直毅編（2007）『水俣の言説と表象』藤原書店。
小林直毅，西田善行（2012）「テレビアーカイブとしての『水俣』」『社会部志林』58巻4号，85–119頁。
小林義寛（2007）「『水俣漁民』をめぐるメディア表象」小林直毅編（2007）『水俣の言説と表象』藤原書店，165–93頁。
塩田武史（2013）『水俣な人　水俣病を支援した人びとの軌跡』未来社。
柴田鉄治（1994）『科学報道』朝日新聞社。
田中優子（2020）『苦海・浄土・日本　石牟礼道子　もだえ神の精神』集英社新書。
原田正純（1972）『水俣病』岩波新書。
水俣病研究会（1996）『水俣病事件資料集｛上巻｝』葦書房。
宮澤信雄（1997）『水俣病事件四十年』葦書房。
山口　仁（2007）「『全国報道』における水俣病事件表象」小林直毅編『水俣の言説と表象』藤原書店，130–62頁。
渡辺京二（1972）「石牟礼道子の世界」『苦海浄土　わが水俣病』講談社文庫，305–25頁。

烏谷昌幸（慶應義塾大学法学部准教授）